

豊饒の女神

三浦朱門



中央公論社

豊饒の女神

朱門

中央公論社

定価二二〇〇円

豊饒の女神

昭和六十年五月十日印刷
昭和六十年五月二十日発行

著者 三浦朱門

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノハノ七

振替東京二一三四

●一九八五

検印廃止

ISBN4-12-001391-X

目次

第一章	女の力	5
第二章	ボーイフレンド	52
第三章	若い女	82
第四章	老青年	113
第五章	結婚	146
第六章	未亡人	186
第七章	娘	235

カ
バ
ー
画
・
加
山
又
造

豊饒の女神

第一章 女の力

一

蘭子は冬の軽井沢が好きだった。

賑やかな夏が嫌いというのではないが、シーズン中は気を張って対応せねばならない知人が多くて休まらないのに、いかにも避暑をして休暇を楽しんでいます、といった顔をしていなければならない。それだけで疲れてしまうのである。

冬の軽井沢は落葉松の林の中に、空き家の別荘が寒さにすくんだように建っているばかりで、人目を気にせず、何でもやれるという解放感を覚えるのだ。別荘とは言っても、表向きは蘭子の手やっている料理学校の寮になっているが、それは税対策上のことで、実際的には彼女の別荘である。

車が峠を登りつめて、高原にでると、平地と同じように大型トラックが疾走していても、景観は北国のそれになる。日射しはうららかだが、気温は昼間ですら零度を切るし、木々の根方や地

面の窪みには何日も前に降った雪が残っている。

別荘に入る道は南側が一段高くて日を遮るだけに凍結しており、舗装をしていない路面は雪と氷で変形して、車は速度を落としても揺れが激しい。運転手の吉田の首筋が赤らんでいる。彼は緊張している。彼女に叱られるのを恐れているのだ。蘭子はそれで満足だった。大の男が女の主人に仕えておどおどしていることが分かれば、何も叱る必要はない。彼女を恐れる気配がない時は、縮み上がるくらいに怒鳴りつけなければならぬ。

白く塗った木の柵が見えてきた。蘭子の別荘である。夏の間は緑の中であって鮮やかだったペンキの色も、雪道の中ではうす汚れて見える。雪はいくら汚れても、光さえあればキラリと光る部分があるのに、ペンキの柵は日陰では灰色でしかない。

「垣根が汚いわね」

「はい、早速にペンキ屋を手配いたします」

助手席の秘書の時田がくぐもった声で答えた。

「いいわよ、何も冬の最中にやることはないわよ。春先にやったらいいの」

「はい、かしこまりました」

時田は秘書とはいっても、蘭子よりも十も年上である。ある銀行の支店次長だったのを、その幹部に頼んでもらうけて、秘書にしたのだ。彼女は自分より年長の男を秘書にして顎で使うのが気にいっていた。

「会議までは私は一人にしておいて」

「はい、わかりました」

門を入ったすぐ右手に大きな建物がある。学校法人の名義になっている以上はやむをえない設備で、教職員の宿舎ということになっていたが、今日はここで会議を開く。幹部たちは次の列車で到着するはずである。蘭子は合宿用の設備をおくのは好まなかったが、お蔭で管理費の大部分も学校の経費として落とせる。母屋の蘭子専用の家屋の暖房費も管理人費も学校の経費になる。

玄関前で車を降りた蘭子は、

「私は少し散歩しますからね。荷物だけを入れておいて」

と吉田に言い置いて、南の庭の方に歩いていった。温かい車から暖房の効いた室内に入りたくはなかった。冬の軽井沢の寒気を肌に感じないと、暖房の有り難さがピンとこないから、彼女はいつも車を降りてから、寒さでチリチリになるまで、庭を散歩することにした。

居間の正面の芝生は雪が完全に融けていたが、植木屋に植えさせた白樺の木立のあたりは、はだら雪である。その上を歩くとパリパリと小気味よい音がして、凍結した雪が割れる。垣根のない南の地所の外れから落葉松の林にでて、身体の芯まで冷えるのを待ってから家にはいった。

手も凍え、鼻の先が感覚が無くなりかけてから入った室内の温かさに、蘭子は満足して溜息をついた。彼女は食べる前は空腹なのが好きだったし、辛かった過去を思うことが現在の幸福を保証してくれるのだ。

ストーブの上に乗せた湯沸かしがシューンと音をたて始めた。本物に見せかけた暖炉はあるが、それとは別にソファやゆったりしたアームチェアで囲んだ一隅の中央に、石油ストーブを置いて

あった。どうしても、その方がセントラル・ヒーティングよりも急速に部屋を温めるには効率がよいし、ストーブを囲み、コヒーなど沸かしながらの方が話が弾むのであった。

やがてガラス窓が曇ってくる。湯沸かしの音と湯気で曇るガラス窓は、蘭子が生まれて最初の記憶につながる。

昭和十年に当時の満洲国の皇帝陛下が来日した。その数日後に生まれたのが蘭子で、名前は満洲国の国華の蘭にちなんだのだ。

蘭子の父は当時、自立して結婚後もない理髪師だった。そして彼女が満二歳と数ヵ月の昭和十二年の夏に大陸で戦争が始まり、兵役を終えて四年にもならないのに、彼は召集されて軍隊に呼び戻されて、大陸に派遣されることになった。もっとも蘭子はそんなことを覚えている訳ではない。恐らくは父が出征して数ヵ月たった冬に彼女の最初の記憶がはじまる。

蘭子の背のあたりに煙突のある石炭ストーブがある。彼女は長椅子に乗って、窓を見ているのだ。ガラスが湯気で曇っていて、それに指でいたずら書きをしている。横に引いた線からはたった水分が涙のように流れおちて、横に引いた線をしめなわに見せる。

記憶というのはそれだけだが、それをはっきり覚えているというのは、そういうこと、たとえば、曇ったガラスに指でいたずら書きをすると、ガラスが汚れるからと叱られたのであろうか。いやそうではない。母親の華やいた笑い声がどういう訳かその記憶と結びついている。

母の仲枝はその時、男の客を相手に際どい話をしていたと思いきや、いた時代がある。幼いながらも、蘭子はそういう母を見るに耐えられなくて、ガラス窓にいたずら書きをしていたのかも

しれない。もっと後になって蘭子がもの心がつくようになってから、伸枝は男の客の髭を剃りながら、子供の蘭子には正確には分からないながら、明らかに性に関係のある戯言を言い合っていたのを記憶している。その頃、父の五郎は召集解除になっていたが、軍隊の階級が軍曹になっていたこともあったのか、もう理髪はせずに町会に勤め、店は専ら伸枝が一人でやっていたのだ。

夏になると伸枝は単服といったワンピースで店にでたが、客の上に覆い被さるようにして顔をあたっていると、客が唇を丸めて、チュウチュウ音をたてて、

「おっかあ、おっばい飲みてえよ」

と言ひ、伸枝はけたたましく笑って、

「ほうれ」

と襟から丸々した乳房を客の顔に押しつけた光景を蘭子は思いだす。その頃は女の乳房は今ほどはセックスと結びついてはいなかった。とはいってもその光景は見てはならないものという印象を蘭子に残している。

ある時は店の理髪用の椅子に伸枝が長々と横になって、たった今、理髪を済ませたばかりといった感じの客が、逆に伸枝の顔を剃っていたこともあった。

「伸枝さんはいいい肌してるね。こうしてシャボンを塗っていると、手が吸いついて離れないもん」

と男が伸枝の肌をなでさすっても、彼女は眠ったように目を閉じてじっとしていた。それを見る蘭子の目付きが陰しかったのだろうか、客はひどく狼狽して、

「あ、蘭子ちゃん、もう学校は終わり？」

と言ひ、西洋剃刀をしまった。伸枝は折角の楽しみを邪魔されたというのか、

「学校から帰ったら勉強するんだよ、忙しいんだから、お店に出てくるんじゃない」

と叱りつけた。

蘭子は自分の行状から考えると、伸枝は自分の母なのだから、多情な女だったのではないか、という気がしてならない。美容院は女性、理髪店は男性と決まっているから当たり前ではあるが、子供心に店に来る客は伸枝がお目当てだったような気がしてならない。いつも若い男が笑ったり冗談をいって、その長椅子に屯していた。冗談の材料は伸枝、それも彼女の肉体に関するものが多かったのではあるまいか。

そうなると、最初の記憶で蘭子が長椅子に一人で窓ガラスにいたずら書きをしていたというのは可笑しい。誰か男の客がいてもよさそうである。彼女は繰り返しそのことを追想しているうちに、その場には客ではない人物がいたような気がしてきた。それは軍服を着た男である。長い剣を下げていた。

「お父さんが長い剣をつつて、店に立っていたのを覚えてる」

と蘭子が言ったことがあった。

五郎は昭和十六年の夏に再び召集されて、それきり伸枝と蘭子の許には帰ってこなかった。フイリピンで戦死したのである。だから写真以外では、蘭子にとって父の記憶は臆である。軍服姿の父の記憶は数少ないのだが、長剣をつつてストーブの前に立っていた父の姿の思い出を伸枝に

話すと、

「それは多分お前の思い違いだよ。お父さんは戦地で曹長になって、長い刀をつるようになって、そういう写真も送ってきたけが、出征のころは鉄砲もって、短い剣を下げて。軍曹というのは、普通の兵隊と同じ服装だったのだよ、あ、もしかするとそれは、憲兵かもしれない。よく来たからね。うるさかったねえ、二言目には出征軍人の妻として、というようなことを言って、ほんとにやり切れなかった」

してみると、憲兵が伸枝に出征軍人の妻としては問題がある、と叱っているのが恐ろしくて、蘭子は二人に背を向けて、湯気に曇った窓ガラスにいたずら書きをしていたのかもしれない。憲兵は男の客を相手にはしやぎすぎると言って伸枝に説教したのだろうか。

その前後、というのはひどく寒い記憶があるので、同じ冬のことと蘭子が勝手に決めている一つの光景がある。寒くて暗い中で、大変な物音がし、人のわめく声もしたようである。軍服の男が二、三人で暗い階段の下で一人の男を殴ったり蹴ったりしていた。

「あ、それは多分、朴だよ。日本名を新井とっていたが、あたしは朝鮮人なら召集はなからうと、お父さんが出征した後に雇ったんだけど、店に住みこんでいたから、始終、憲兵が見回りにきたわね」

五郎が出征した後、伸枝には理髪の技術はないし、当時、若い職人は次々に召集されていたので、店をやってゆくのに、伸枝が、召集の恐れのない朝鮮人の職人を雇ったのは納得できることであった。

その朝鮮人がある朝、憲兵に踏み込まれて散々に殴られ蹴られたあげくに、縛られて引っ立てられていった。あれは一体どうしたことだったのだろう。大きくなってから蘭子は何度か母にそのことを尋ねたが、妙な返事はなかった。

七年前に伸枝がまだ六十代だというのに、脳出血で亡くなった時、父の兄弟子だったという老人が葬式に列席してくれた。この谷口という老理髪師はもう隠居していたが、両親を失った蘭子の知らない昔のことをよく覚えていて、話が聞きたさに、彼女は彼を自分のマンションに泊めたことがあった。

「あんたんとこの店は高円寺の住宅地の風呂屋のそばにあってね。当時は風呂に入って、床屋でサッパリしてという気分があってね、あの辺は安サラリーマンの巣だったから、彼らは休みのデイトの時なんか、朝湯に入って、おたくのヤング軒で頭をやってもらって、それから女と待ち合わせて、飯を食いにいたり、どっかにしけこんだり、という段取りだったと思うよ」

ヤング軒という店の名前も谷口に言われて思いだした。

「そうだよ、あんたのおっかさんという人はあんたに似て、遣手だった。今でも覚えているけどね、『戦時下の精神を整髪するヤング軒』なんてビラを作ってたな」

谷口はブランドーをお湯でわったのをまるで焼酎のようにちびちびと飲みながら、ヤング軒という理髪店を開業した若い夫婦の話をしてくれた。

谷口も五郎も神田の学生街で理髪の修業をした。だから二人とも学生や若いサラリーマンの頭を得意とした。谷口は兵隊には取られなかったので、当時、工業地帯として発展のいちじるしか

った川崎で店を持った。五郎のほうは兵隊に行ったが、優秀な兵士で、二年間の兵役を終えた時の階級は伍長勤務上等兵というので、召集される時は下士官の伍長の階級が与えられることになっていた。それが仇になって、大陸で戦争が始まると真先に不足勝ちな下士官要員として、戦場に引きだされてしまった。

伸枝は二人の理髪職人が働いていた店のすぐ近くの、ミルクホールに勤める女給だった。ミルクホールというのは今なら喫茶店の一種だが、牛乳が健康に良いといわれて、それを愛用するのは新し物好きの学生だから、神田あたりには××牧舎といった名前のミルクホールがあって、客は熱い牛乳に、シベリアと呼ばれたカステラと餡を幾層にも重ねたケーキなどを食べた。飲食店としてはもっとも真面目な部類で、置いてあるのが、官報と硬派の新聞だけというのだったから、法律書生が好んでたむろする場所になっていた。

伸枝は桃李牧舎という店の人気女給だった。彼女を映画や食事に誘いだそうとする学生も多かったし、伸枝もよく彼らとつきあってはいたが、彼女の先輩には、子供がお腹にできた段階で捨てられたという例はいくらでもあったから、学生服の上に赤いマフラーをするような男のデイトには応じたが、深入りはせず、結局、夫として彼女を選んだのは五郎だった。

麻布の連隊にいた五郎は日曜になると、軍服のままで、働いていた店に顔を見せたが、後にはそれは口実であることが分かった。帰りには必ず桃李牧舎によって、ミルクを時間を掛けて飲んでいった。そして二人は五郎の兵役がすむとすぐに結婚して高円寺でヤング軒という店をもつことになった。

「父が出征して朝鮮人の職人がきたというけれど」

谷口が焼酎式にブランデーを飲むので、いくらかでも焼酎に近いかと、ジンを勧めながら、冬の朝の検挙のことを話すと、谷口は頭をかいて、

「あいつを入れたのが、おれだったもんで、おれまで憲兵隊に呼びだされてよ、えらい目にあつたもんだよ。とにかくね、出征軍人の妻が間男を作るのが、一番士気に影響するとかで憲兵は女房たちに興味もあつたんだな、留守宅をよく回ってたよ。あの朴という野郎は伸枝さんに手をだしたというので、パクられたのよ。朝鮮人のくせに悪い野郎だつてんで、多分キンタマなんか使ひもんになんないくらい痛めつけられたろうな」

「そんな事実があつたんでしょうか」

「何でも憲兵隊に投書がいったらしいね。伸枝さんの寝部屋に朴がはいりこんで、眠ってる伸枝さんをマッサージしてたというんだがね。そんなことあつたかな」

「あつたかもしれないわね」

蘭子は男をじらすのが好きである。学校の新築現場を視察していて、労務者が彼女の靴よりも低い位置から、スカートの中を見上げるようにすれば、わざと見たいだけ見せてやる。そして欲望に身体中を膨らませている男たちを完全に黙殺するのが楽しかった。中には自惚れるのがいて彼女に付きまといえ、そういう男は遠慮なく警察に突き出すようにしている。母の伸枝にもそれと似た趣味があつたのではないだろうか。

ミルクホール時代に男からちやほやされた伸枝は、五郎と結婚して理髪店を手伝うといつても、